

## 感謝のバトン

中央区立日本橋中学校3年 加藤 小侑

近所に住む祖母は、食べるのが大好きでデパ地下でいつも美味しい物を買ってきてくれる。そんな祖母に異変があったのが、今年の一月初旬だった。八十歳で持病もなく、元気な祖母の脚に青アザができていた。マッサージ機で内出血したのかな？と、近所の病院で診てもらった。ついでに血液検査もしてもらうことにした。その二日後、母の携帯に病院から電話があり、すぐに病院に来るように言われた。白血病の可能性が高いため、大きな病院で詳しく検査するように勧められた。

大病院で告げられた検査結果は「骨髄性白血病」だった。そこからの祖母の生活は一変した。先生からは、入院して抗がん剤治療を勧められたが、祖母は入院を断固拒否した。飼っている猫二匹と共に暮らし続けたいと。このまま治療をしなければ余命三週間、だが、抗がん剤治療をしたとしても、完治は難しいと言われた。そこで年齢も考慮し、入院を嫌がる祖母の意思を尊重した。訪問診療で、採血、輸血を、毎週してもらうことになった。あんなに元気だった祖母の闘病生活が始まってしまった。

毎週、採血、輸血の繰り返しだった。始めのうちは、祖母はそんなに変わらない様子も見えたが、血液の数値の変化と共に徐々に弱っていった。食欲も体力もなくなり、外出もしなくなっていく。ふくよかだった祖母の体はみるみる痩せこけていき、寝たきりの生活になってしまった。

在宅介護にはケアマネージャーさんという頼りになる存在がいる。介護ベッドを導入し、仕事をしながら介護をする母を気遣い、看護師さんとヘルパーさんで、朝から夕方までローテーションを組んで見てくれるようにもしてくれた。これだけの人の手を借りての介護、母は相当な金額の請求になることを覚悟していた。しかし、実際には思っていた金額ではなかったのだ。それは税金で医療も介護サービスも、大部分をカバーしてくれるからだ。「高額療養費制度」といい、国が医療費の一部を負担してくれる。母は安心してお願いすることができた。看護師さんとヘルパーさんとチームとして祖母の看護にあたった。それからの母は、一人きりではないと、精神的にもずいぶんと助けてもらったそう。

八月半ば、祖母は闘病の末、旅立って逝った。余命三週間と言われていた祖母だったが少しだけ長く一緒にいてくれた。今でも祖母がいなくて寂しくてたまらない。でも、この経験でたくさんの人にお世話になり、知らない世界を見せてもらった。税金が病気の人をこんなにも支えていることを知った。助けてくれた方々に感謝の気持ちでいっぱい。

私が大人になり、働いて税金を納める時、この感謝の気持ちを恩返ししたい。税金を納め、社会に貢献し、多くの人を支えられるようになりたい。